

# 私の幼児教育論

——保育を考える——

## はじめに

私は本書を愛読しているひとりである。本書を手にするようになってから、まだ八年と少々であるが、この間、数多くのすぐれた論文、実践記録に接することに、ある時は勇気づけられ、ある時は心の支えとなってくれた書である。それが、今回の「私の幼児教育論」執筆ということになり、本当に驚いている。

幼児教育に携わった経験も浅く、ましてや幼児教育論を論ずる力もないが、一緒に苦勞を共にしてくれた幼稚園の先生方のおかげで、自分の考えをまとめる良い機会でもあることを合わせ、ご批評を受ける覚悟をきめたのである。

私が、直接幼児教育に携わったのは、昭和四十六年四月から、五十二年三月までの六年間である。もともと、義務教育の教員で

河合 英二

ある私が、突然、公立幼稚園勤務を任命され、ある程度は幼稚園の保育内容をつかんでいたつもりであったが、幼児と直接ふれ合って、自分の考えていたことのあまさに気がついたわけであった。

この短い六年間で学び得たものが、私の幼児教育に対する考え、構えのすべてである。したがって、何十年と実践を積み重ねておられる保育者からみれば、まことに視野の狭いものに感じられるかもしれない。しかし誰もその環境の中にとっぷりとつかっていればいるほど、時として距離をおいて外から眺める必要があるのではなからうか。この場合、いろいろな問題点が見出せると同じように、未経験の私から見て感動する面も多々あるが得心のいかない不思議な面もないわけではない。

幼稚園の核は、何といても保育である。今、目の前にいる幼

児に何をなすべきかを具体的につかみ、生きた保育が毎日展開されなければならない。以下、保育についての私見を述べてみたい。

○

幼児の生活は遊びであり、遊びが生活のすべてである。遊びの中で発達するのが幼児である。これらのことは、幼児教育に携わる人から良く聞くことばである。私も全く同感である。

しかし一方では、私のクラスの子どもは遊ばなくて困る。どのようにしたらもっと活発に活動するようになるのか、という声も聞かれる。幼児は、本来、遊ぶものである。ただそれが少人数か多人数かは別として（時には母親とだけしか遊んでいなかったかもしれないが）家庭でも遊んでいたはずである。

それが遊ばなくて困るといふ声が出るのは極端な云いかたをすれば、幼稚園において、遊ばせない何らかの原因をつくっているのではないだろうか。

例えば、かざぐるまを作つて遊ぶという保育内容を設定し、材料あつめからはじまつて、幼児の創意と工夫を生み出すための良いアドバイスを教師は行なう。幼児は喜々として、かざぐるま製作にはげんでいる。

この姿からは製作活動としてのねらいは、ある程度達成していると思う。しかし、その後の指導で園庭等へ出て、作つたかざぐるまを使って遊んでいる光景を観察していると、教師側が「高い所と低い所とは、どちらが良くまわるか」というような保育のかまえになっている。

すべり台の上に立たせたり、園庭や中庭でためしたりさせるのであるとか、確かによくまわる、あまりまわらない、ということ自分の作つたものがどうしてまわらないのかを考えたり、ともだちの作品をよく見たりすることを含め保育を進めていくことに、異存はないが、高い所、低い所とのちがいを見出そうとすることが、幼児の科学性の芽ばえなど考えることは、あまりにも、幼児の遊びに対する認識が不足しているのではないだろうか。

もし、すべり台の上でかざぐるまがまわらなく、園庭の時にまわつたらどう指導するつもりであろうか。幼児にとって風の力などに関連づけるよりも、作つたもので遊ぶ楽しさを味わわせることが、何よりも大切なのである。子どもが遊ばない原因も、このようなところにひそんでいるかもしれない。

○

次の実践記録を紹介したい。

二月のある日、ままごとコーナーでの会話である。

「はい、次の方」

「どうしましたか」

「かぜらしいんですけど」

「では、ベッドに寝てください」

このように、看護婦、患者、医者と、はっきり役に分かれ病院ごっこが始まった。というのは、現実にけがをした幼児の包帯を、私（保育者）が、ままごとコーナーでまきなおしをしたのがきっかけであった。この遊びを「もつと発展させたい」と思い、看護婦、医者用の白衣を給食用のカップパー衣で代用しようとしてみた。するとどうだろう、

「わー、本当の看護婦さんみたい」

と、うれしそう。すると隣にいたY子が、

「包帯にするものがほしいなあ」

と、要求してきた。この時、私の脳裏をかすめたのは、本物の包帯であった。「でも子どもの病院ごっこに本物の包帯は少しもつたないかな」とも思ったし、「本物の包帯でなくても、それに代わる物さえあれば、いいのではないか」とも思った。

しかし、せっかく給食用のカップパー衣を着て、楽しんでいるのだから「包帯も本物を出してやろう」と決め保健室から持つてくると、

「わー、本物の包帯だよ」

とびっくりした顔。するとM子が急に

「じゃあ、お客さんを連れてこなくちゃあ」

「名前を書く紙をつくらなくちゃあ」

と、大騒ぎ。カップパー衣、包帯を出す前では予想もできないほどの活発さであった。

このように、何もないところでは、いくら幼児でも遊びが深まらない。特にごっこ遊びはそうである。しかし、一たん一つの物を与えると、幼児は独得のすばらしい想像により、四方八方へ遊びを広げていってくれるのだ。換言すれば、水槽にインクを落した時のようだともいえる。

これは、おとなでは、とてもまねのできない幼児の魔力である。この時期にしかみられない魔力を、精いっぱい発揮させてやらなければならない。しかし私たちは、それをさせてやっているだろうか。現に私も「ただの病院ごっこだから」と、あまく考えていたが、迷ったあげく、本物の包帯を出したことは、この場では良かったと思う。でも、ごっこ遊びには本物を与えられないも

のがたくさんある。例えば、ままごとで使う包丁である。本物ではないが、幼児は満足して使っている場合が多い。このように本物でなくても活動が活発に行われることもあるが、道具を与える時は、おとなの妥協で与えてはならないと思う。幼児のすばらしい魔力を吸い取り紙で吸い取ってしまうことと同じだからである。

幼児だからこそ妥協は許されない、決して本物でなくても良い。幼児の想像力を呼び起すようなものを与えたい。そして、この時期に見られるすばらしい魔力を十分發揮できるように仕向けたい。私たちはインクを吸う吸い取り紙になるのではなく、よりよいインクを幼児に提供することである。

これは、真山泰子教諭（現・豊田市立林丘幼稚園勤務）が、四歳児担当時に『子どもは心から変身する』と題した実践記録の一部である。保育中における教師の配慮・判断が如何に大切かが良くわかる。そして、この価値判断が、幼児を変革させていく重要なポイントであり、このポイントを実にうまく真山教諭はとらえている。

幼・小の関連という言葉もよく耳にする。今回の指導要領の改訂により、小学校低学年における、合科的な指導がうちだされてきた。このことは、従来各方面より、幼稚園と小学校低学年との教育に、大きなへだたりがあるとの指摘を、ある程度解消していく方向とも考えられる。

神戸大学教育学部附属明石小学校では、この幼稚園教育との段差を解消すための、すばらしい実践がなされている。（子ども遊びや生活に根ざした総合学習）

このように、幼・小の関連を考えると、小学校教育はこうだから幼稚園はどうすればよいかというよりも、幼稚園は幼児を保育する独立した教育機関であり、小学校教育の先取りの発想は通用しないであろう。

一斉保育だ、幼児自ら選んで行う経験や活動だとかの保育形態を論ずる時代でもない。

要は、ひとりひとりを大切に、どの幼児も、その子なりに満足する幼稚園生活を送っているかどうか、重要なのである。幼児にとって、何が今必要で、何が大切かということを十分ふまえた上での保育が展開されなければならない。

（愛知・豊田市教育委員会）